



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	反復可能な芸術作品の存在論とまばらなメレオロジー唯名論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	西條, 玲奈
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11589号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57733
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Reina_Saijo_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 西 條 玲 奈

主査 教授 山 田 友 幸
審査委員 副査 教授 千 葉 恵
副査 教授 北 村 清 彦

学位論文題名

反復可能な芸術作品の存在論とまばらなメレオロジー唯名論

本論文の主題は、演劇、音楽、文学、写真などの、同一の作品が繰り返し上演され、演奏され、何部も印刷され、何枚もプリントされうる、反復可能な芸術作品の存在論である。このように同一の作品が複数の出現をもちうるジャンルについては、作品と個々の出現との関係を、普遍者とその事例との関係や、記号論におけるタイプとトークンの関係として理解しようとする見方が根強い。本論文で西條氏は、このような見方を「芸術作品の普遍者説」という名のもとに一括して批判し、対案として「まばらなメレオロジー唯名論」を提案し擁護している。

「まばらなメレオロジー唯名論」とは、「まばらなメレオロジー融合体に基づく唯名論」の略称である。メレオロジーは事物とその部分の関係を扱う理論であり、近年多様な拡張や応用が試みられている。この理論においては、任意の事物の集まりについて、それらの事物を部分として含む融合体を定義することができる。このため、ある意味では融合体はいくらでもあることになるが、芸術作品に相当する融合体は稀にしか存在しないという意味で「まばら」である。その部分となるのは作品の出現だが、西條氏は、個々の出現が特定の作品の出現であるためには、その出現の制作者が当該の作品を上演／演奏／出版／焼き付け等することを意図していること（制作意図の条件）と、その出現が当該作品の源泉（究極的には脚本の執筆行為、作曲行為、原稿の執筆行為、写真の撮影、現像、焼き付け行為等）に因果的に由来すること（因果的源泉の条件）が必要であるとみなす。芸術作品を、この二条件により規定されるまばらな融合体とみなすならば、普遍者を要請せずに、芸術作品がもつさまざまな特徴を、存在論の中に無理なく位置づけることができるというのが、西條氏の主張である。

審査にあたっては、議論の論理的整合性と先行研究の理解の的確さの検証に加え、まばらなメレオロジー唯名論が反復可能な芸術作品の特徴を実際に適切に捉えているか検討した。メレオロジー融合体説を含む既存の唯名論にとっては、普遍者説の論拠とされてきた、

同じ作品の出現の間の質的類似と因果的効力の類似を適切に捉えることは困難であったが、これに対して、本論文で定式化された、まばらなメレオロジー融合体に基づく唯名論では、これらの特徴は、出現が制作意図の条件と因果的源泉の条件を満たすことの結果として無理なく理解できる。またこの立場では、普遍者説にとって説明が困難であった作品帰属の曖昧さ、すなわち、失敗した上演が、それでも上演しようとした作品の上演と認められ、設定を大幅に変更したにもかかわらずグールドの『マクベス』や蜷川の『NINAGAWA マクベス』が『マクベス』の上演と認められるといった現象も、この二条件を満たすことによるものと理解することができる。

他方、融合体説によれば、作品の存在が出現の存在に依存することになり、上演されない脚本のように出現を欠く作品が存在しうることが理解できなくなるという点は、「作品」概念の多義性により無理なく理解可能になる。これは「作品」の存在が、脚本や譜面等の成立により理解される場合と、上演や演奏などの出現の存在として理解される場合があるという多義性である。前者の意味での「作品」の存在は出現に先行し、出現に依存しない。しかし脚本や譜面が失われ、記録も記憶も失われ、出現もその可能性も消滅したならば、もはや作品は失われたとみなさざるを得ない。この意味で、融合体説においては、作品は消滅しうるものとみなされることになるが、この帰結がそれほど不自然ではないという西條氏の主張は説得的である。

このように本論文は、反復可能な芸術作品を、制作意図の条件と因果的源泉の条件を満たす出現からなる、まばらなメレオロジー融合体とみなすことにより、時空のうちに位置をもたない普遍者やタイプのような抽象的対象の存在を要請せずに、反復可能な芸術作品を存在論のうちに無理なく位置づけうることを示している。これは現代の分析形而上学における芸術作品の存在論への有意義な貢献である。

ただし本論文は、主に演劇作品を例としつつ反復可能な芸術作品全般について論じているが、ジャンルの違いをあまり詳しく論じていないことや、より広い芸術論の伝統への言及が少ないことが、審査の過程で指摘された。しかし、後者の点は、本研究が現代の分析形而上学における論争の文脈に属する研究であることによるものであり、また、どちらの点も本論文が含む新たな貢献の価値を損なうものではなく、本審査委員会は、全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。